第53回 in出雲 中四国仏婦大会に参加しました

もっと広がれその輪・和・環

本願寺の仏教婦人会では若婦人の研修は４５歳以下となっております。
お念仏のみ教えを子や孫に伝えていくためには若い方に参加していただくことがとても大切です。周りに該当者はいらっしゃいませんか。
忙しい、まだ早い、もう少し子供の手が離れたら、難しい理由は山ほどありますが、でも間に合わなくなったら大変です。どうぞ輪を広げてお誘いください。

浄光寺仏教婦人会若婦人代表として３名参加しました。
写真右より若坊守さん
佐々木弘恵さん、佐々木敦子さん

「中四国地区仏教若婦人大会に参加して」

佐々木　敦子

私が跡市の佐々木家に嫁ぎ一年も経たない頃、十月十四日に中四国仏教若婦人大会が出雲であるので是非参加して欲しいと言われ、戸惑いながら義妹と共に参加しました。
浄光寺の門徒から参加したのは私達と若坊守さんの三人でしたが出雲市民会館は人で埋め尽くされていました。（若い人は少数でしたが。）
開会式では副住職が笛を奏でられ、雅楽もされる事に驚きました。その後講演や尺八の演奏、歌などいろいろな演目が行われましたが、その時々にお念仏を唱える人の声が。
これがあの『お念仏がこぼれる』という事か・・と思い少し感動を覚えました。
歌は六、七曲は歌ったでしょうか、それとお昼の『ダーナ』の時間・・この会は多くの発見と驚きの連続でした。
帰りに副住職夫妻と四人でケーキを食べながらお話をし、とても楽しいひと時を過ごしました。でも　私の口から『お念仏がこぼれる』日はまだまだ先の事でしょう。

※　佐々木敦子さんは跡市鳥八家ご長男のお嫁さんです。昨年秋平田市より嫁いで来られました。皆さんよろしくお願いします。

《今月の言葉の解説》　　銀座はもともと江戸時代に設置された銀貨鋳造所だったそうです。そこで初めて働く人はまず、ひたすら本物の銀貨に触れ、偽ものを見分ける能力を鍛えました。本物に出会うことで偽がわかるようになるのです。
私たちも、真実の仏様のみ心に出会うことで、自分の偽物の姿に気づかされるのです。

仏教用語解説 no.30

正信偈六首引き和讃

浄土和讃（三）

―かたよらない光―

② 如来の十二の光 無辺光

解脱の光輪きはもなし
光触かふるものはみな
有無をはなるとのべたまふ
平等覚を帰命せよ

現代語訳
阿弥陀仏の解脱の光明は、きわまりなく十方世界を照らしています。その如来の光明に触れるものは、かならず有無の邪見を離れることができると「讃阿弥陀仏偈」にのべられています。
ゆえに私たちは、この平等をさとらせてくださる阿弥陀仏に帰命するばかりです。

この和讃は前号で掲載した無量光（十劫の昔から未来永劫尽きることの無い光）に対し、仏の智慧の光が十方世界をくまなく照らす徳を讃えています。
如来のおさとりは何ものにも束縛されない広々とした世界です。このさとりから私たちの束縛を解く光明が放たれています。如来の光明は際も無い、無辺の光明で無辺光とたたえられています。それを和讃では「解脱の光輪きはもなし」と詠じられています。
無辺光とは、日本とかアメリカとかヨーロッパとかの処を嫌わず、どこでも照らすということです。また善人とか悪人とか男女、優劣、好き嫌いと分け隔てない一辺にかたよらない光明ということです。ですから無辺光とは、一切衆生一人としてもれることなくお照らしくださる光明です。
私たちは煩悩で物事を分け隔てて、いずれかに偏った見方しかできません。有無とは、この私たちの迷いのあり方すべてを二字で言い表されている言葉です。
仏様の無辺の光で心中の計らいが解かされ、有無の執着を離れたとき、真実の平等のさとりを与えていただけるのです。無辺光に照らされ、わが身の計らいの姿に気づかされ平等覚を仰がざるを得ないのです。

本当のことは阿弥陀様の平等の光に照らされてみえてきます

私の心はいつもはからいでいつぱいです

生死とは迷いの世界です。私たちは欲や煩悩の計らいから偏った見方しかできないため、うろうろして今いる場所を見失ってしまいます。有ることに苦しみ、無いことに悩んでしまうのです。